## 「大正デモクラシー」の再検討

田藤平

澤村野

晴一敬 子郎和

趣旨説明

(平野敬和

シー」の思想史的意味を再検討することには、大きな意義 がある。 問い直されている現在、その前提となる「大正デモクラ あった。さまざまな学問領域で戦後の民主主義の有効性が 主主義的傾向と東アジアの民主化を連動させる点に特徴が わたる思想・運動であった。それは空間的にも、日本の民 「大正デモクラシー」は広く政治・社会・文化の領域

題を共有している。

り上げることには、二つの問題関心がある。第一に、吉野 本パネルセッションで「大正デモクラシー」の思想を取

> ことである。三人の報告者は、とりわけ一九七〇年代以降 想史学における「大正デモクラシー」論の再検討を試みる 家を取り上げ、彼らが時代といかに向き合ったのかを検証 のデモクラシー研究の成果に対する批判と継承、という課 することである。 作造・石橋湛山 ・柳田国男という、 第二に、戦後の歴史学・国際政治学・思 当該期を代表する思想

要があるだろう。これまでの「大正デモクラシー」論(そ 正デモクラシー」と「戦後民主主義\_ は、「大正デモクラシー」の概念と時期区分について、検 討されるべき点を挙げておきたい。概念については、「大 具体的な論点は、三人の報告のなかで示される。ここで の関係を捉え直す必

という一国史的な時期区分を前提としていると、その問題 て、 が見えにくくなってしまう。 シー」をアジアとの関係性において捉え返す場合、「大正 況が大きく異なるからである。 る必要があるだろう。世界大戦終結の前と後では、 政治の展開期までを指すことが一般的だが、それに加え 分については、 もそも、「大正デモクラシー」という呼称自体)は、「戦後民主主 主義や帝国主義の理解の問題に顕著である。また、 「大正デモクラシー」の世界史的同時代性を考えるな の評 第一次世界大戦が日本の思想界に与えた影響を考慮す .価の枠組みに強く規定されてきた。それは、 日露戦争後における民衆の台頭から、 とりわけ、「大正デモクラ 言論状 時期区 政党

吉野作造の軍部批判と「満蒙特殊権益」論

(藤村

郎

一一年所収

視点である。本報告では、 の文脈で論じられてきた。この枠組みから外れてしまうの できるだろう。 判のうち、 ラシーと総力戦体制という視点から、 野作造は、 次世界大戦後の新たな帝国主義政策の形成という 質量ともに代表的論客として位置づけることが だが、 わゆる「大正デモクラシー」 研究史上、 吉野の軍縮や統帥権批判などの 彼の軍部批判は、 もっぱら国内政治論 期の 軍部批 デモク

義をいかに論じたのかについて述べた。「満蒙特殊権益」に関する論評に的を絞り、新たな帝国主軍部批判論のうち、関東軍および軍と密接な関係を持つ

とも、 見したのは「支那保全論」に則って勢力範囲を維持しなく 吉野は大戦末に、これを解決に導く一つの現実的な力とし たがって中国に設定された列強の勢力範囲は障害であった。 中提携を達成するには、 る政策であった。そもそも吉野が目指した「対等」なる日 に影響されたもので、 見解は、 殊権益」、杉田米行編 が可能になるということにあった て米の提唱する門戸開放政策の強化に着眼する。 を支持したことから保守する立場にあった。ところがこの 大戦初期の吉野は満蒙権益について、 門戸開放政策の強化によって事実上中国の領土 明治アジア主義者から受けとった「支那保全論 『一九二〇年代の日本と国際関係』 自身の中国 中国の「自強」が必須であり、 「自強」化論とは矛盾 (拙稿「吉野作造と満蒙特 対華二一ケ条要求 吉野が発

って、巨大な日本の軍事力の存在を許容し、間接支配ともでは解体しなかった。関東軍と満洲軍閥との「密約」によ蒙権益は、門戸開放政策やワシントン会議に乗りいるだけっていたのは、自国の満蒙権益であった。だが大戦後も満っていたのは、自国の満家権益であった。だが大戦後も満っていたのは、対域のなかでもっとも大きな「障碍」とな

囲を確立しつつあった。吉野はその最新型の帝国主義につ なるなか、 を通じた政治的軍事的影響力を解体しようと関東軍 し続けた。 いうべき 九州大学博士学位論文)。 「密約」 日本の 第一次世界大戦後、 「満蒙特殊権益」となりつつあったからである 問期における関東軍の駐兵問題の史的展開」二〇一五 の存在を弱点と見て執拗に指 軍部は満洲を中心に新たな方式で勢力範 このため吉野は あからさまな侵略が困難と 関東軍と張作 摘 中を批判 張作霖

n

## 石 橋 湛 山 のアジア

平

野

敬 和

ある。

て批判し続けていたのである。

が発表 序についてどのような構想をもっていたのかを明らかにし 彩流社、 橋湛山を中心に」 アジアの国際政治をめぐる議論に注目した。ここでは、 帝国主義批判と植民地論、 た「小日本主義」の思想史的位置付けを試みるに当たって、 のアジア論を取り上げた。 本 ・報告では、 二〇一五年)を踏まえて、 した「デモクラットの対外認 第一 (伊藤信哉 次世界大戦から満洲事変までの石橋湛 中 ·萩原稔編 とりわけ、 国やアメリカを中心とした東 石橋が東アジアの地域秩 『近代日本の対外認識Ⅰ』 識 当該期の彼が掲げ 吉野 作 造・ 私 石

> 時に、 ジアの連帯論の提示という点で、 張したことである。 原理に対する批判という点で、 ない理念的なものへの共鳴、 序を模索する際に、 てくることに注目した。 九二〇年代の石橋には、 根本的な問題として日本人の対外認識を改めさせると同 石橋 その議論を結局は国益につながるという視角から主 の議 論 0 特徴は、 経済合理主義の側面だけでは割り切れ そのうえで、 民族自決主義への対応や日本とア 日本政 すなわち、 帝国主義・ 独自の 一府の政策という以上に、 思想家としての姿が現れ 世界大戦終結前後から一 彼は東アジア 存在感を示したので 植民地帝国の支配 の地域 ょ 秩

ジアの民族運 けられた中国ナショナリズムとそれを支援するソ シントン体制をめぐっては、 地 対する評価に顕著に現れてい そこには、 ンテルンの 政治の枠組みを規定したヴェ た様を見て取ることができる。 記論は、 の新たな連帯をもたらす理念に、 そのような石橋の思想的立場は、 ヴェルサイユ会議の内容に疑問を投げかける東ア 「弱小国」とともに生きるという、 動向を注視して、それらとの連携を模索した。 動の正当性を認めるものであった。 る。 その体制の ルサイユ・ワシントン体制 彼の帝国主義批 世界大戦終結後 石橋が強く惹かれてい 外部 日本とアジ また、 連・ に位置付 乳判と植り 0 コミ 国 民

クトを受ける形で、東アジアの地域秩序形成の問題として 心の議論に回収する方向ではなく、 られるような、 る。すなわち、 容を新たな段階に深化させたものと位置付けることができ 張されていた「小日本主義」を受け継ぎながらも、 考昭・三浦銕太郎など『東洋経済新報』の言論人により主 余儀なくされるものの、二〇年代にあり得た思想の 展開された点に特徴がある。それは、 その意味において、石橋の議論は、 植民地経営に生じる問題を経済的コスト中 石橋の「小日本主義」は、 民族自決主義のインパ 世界大戦前から植松 満洲事変後に挫折を 植松・三浦に見 その内 可能性

田

柳田民俗学と「新しい歴史学」

を提示するものであった。

田澤晴子

て、

めは る。 性である。三つめは一九一○年代から二○年代にかけての 俗学研究と柳田民俗学との密接な関係の指摘である。二つ られてきた。 中心に官学アカデミズムに対する在野の学問 ミズムと柳田民俗学を再考する指摘や研究が相次いでい 柳 一つめは京都帝国大学を中心とする中世史研究者や民 田 .国男が創設した民俗学は、 土研 究 しかし、近年は三つの視点から官学アカデ の研究方法の官学アカデミズムとの共通 鹿野政直や福田アジオを の代表と論じ

> である。 新しい歴史学」の潮流と柳田民俗学との関係という問題

げた。 は雑誌 り、 指摘した。一点めは記紀における「史実」という問題であ 郷土資料の史的価値をめぐり両者は対立していたことを挙 あることを指摘した。そして三点めに史蹟保存事業におい の二点においてアカデミズムと『郷土研究』 大戦を画期として二期にわけて検討した。第一期において る一九一〇年代以降三〇年代初頭までを対象とし、第一 の目的である。 一 の 一 これらの動向を受け「新しい歴史学」 両者は相互補完により事業を隆盛に導いたと同時に、 二点めに資料の少ない中世史研究の開拓である。 郷土研究」及び「民俗学」を捉えなおすの 『郷土研究』が当時の歴史学に提起した問題を三点 時期は柳田民俗学の形成から確立にいた の潮流 は協力関係に 0 が本報告 なかで

間 では、 の著作を「詩 とづく多数事例の比較考量研究が評価された。そして柳田 のなかで高木敏雄の比較神話学、 る認識について検討した。『史学雑誌』 次に第二期における歴史学界の 上の方法・理論に懐疑的反応がみられた。この基本的傾 文化史、 人的直観」 人類学・考古学隆盛による文献研究相対化 の優れた 欧米の人類学の方法にも 「文明論」と評 「新しい歴史学」に関す (東京帝国大学史学会) 価

同様にみられる。 向は柳田と関係の比較的深い『史林』『史学』においても

想された。 り発生した社会問題を解決する日本独自の歴史学として構 を再構築することが柳田 否定し、日本の生活事例を資料として時系列に沿って歴史 解消をめざす点、社会問題解決のための専門分野の総合を 築する点、アカデミズムと一般の歴史資料をめぐる対立の 文化史学と比較すると、 解決をめざす学問である。民俗学に接近した西田直 の精神生活の解明を通じて維新以来の社会的課題の の歴史資料として活用し、身近な家・共同 企図している点で異なっている。 新しい歴史学」という新潮流に呼応しつつ、近代化によ 柳田 のいう「我々の史学」とは、「伝説」 日本の事例から帰納 の「史学」である。 西欧の民俗学理論導入を .体史並び や言 柳田民俗学は 的に理論を構 語 組織的 に民族 郎 方

平野敬和・同志社大学嘱託講師

(田澤晴子・岐阜大学准教授郎・日本学術振興会特別研究員

(藤村